
公園

大江戸巨砲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
公園

【Nコード】
N6478L

【作者名】
大江戸巨砲

【あらすじ】
主人公は昔の思い出を探して、幼い頃よく遊んだ公園に訪れた。

(前書き)

普段散歩中に考える妄想を文にしたらどうなるのかと思って書いてみました。よろしくお願ひします。。。

覚えているのは、大きな欅の木と、彼女の笑顔。そして幾つかの約束。

ずっとなかよしでいる事。この場所を誰にも言わない事。そして

日常とは隔絶され、人々の憩いの場であるところの公園。そこでの時間の流れは煩雑な日常に比べるとずいぶんと穏やかだった。と言っても10年以上の月日の流れの中で風化してしまった、僕の記憶との共通点を見つけるのは不可能と違ってよさそうだ。

遊具はより安全なものへと姿を変え、いくつかの区画はよそ者の僕を拒絶するかの様に、白いフェンスで覆われ、その中に頻繁に工事車両が出入りしている。

「来れば思い出すかと思っただけど、無駄足だったかなあ……」

思い出の公園に来ては見たものの、思い出の「お」の字も見つからない。

「今更また会えるとは思ってないけど……あの欅ぐらいは見つけないなあ……」

そんな願いも空しく、もう公園を2周と半分ほど周ろうかという時、「兄ちゃん、何か探しものか？」

どう鼻屑目に見ても普通の生活を送っている方には見えないその人は、こちらの不安を知ってか知らずか積極的に話しかけてきた。

「俺はここは長いんだ、探し物があるんだっいたら教えてやるぜ」

「ああ、大きな欅の木を探しているんです。昔あったと思うんですが、大きな木はイチヨウと桜しか見当たらなくて……」

「ああ、櫛かい、なら知ってるぜ。まあ立ち話もなんだから向こうで座って話そうや」

反論する暇もなく、軽食と書かれた移動販売車に向かっていく。

櫛の場所を聞き出したら適当に頃合いを見て逃げよう、そんな考えをよそに、その中年の男性、ノブさんというらしいが、は何品か注文している。

「ほら！お前も食えって！」

家族連れの中では流石にノブさんは浮いていて、頂いたたこ焼きの味など全くとってわからない。

「このあたりは県の指定公園になってな、ずいぶんと中身が変わっちゃまった。俺の寝どこだって…」

「あ、あの、それで櫛の木って何処に…」

流石に周りの視線が痛い。少し不躰ではあるけど、本題を切りだす。

「ああ、そうだったな。まあちょっと待ってな。判りやすいように地図貰ってきてやるから」

ノブさんはそう言っつて、食事をビールで流し込むと、公園の奥へと消えていった。

ままだう30分近くたっている。からかわれたのだろうか。まあもういい、見つからなかったのは残念だけど、縁がなかったと諦めるか…

自分の中で淡い思い出と決着を付け、その場を後にしようとした時

「お兄さん、3200円、まだ受け取ってないよ」

ここでやつと事態を飲み込み、僕は自分の不用心さを心底後悔した。

「お兄さんも災難だね。ここ、ああいう人多いんだよ」

移動販売車の青年が同情の言葉をかけてくれはするが、それで僕の生活費が返ってくる訳ではない。軽い返事で流す。

「何か探し物があるって？わかる範囲でなら教えてあげるよ」

もうどうとでもなれ、だ。最後の望みを、と経緯をすべて話す。

幼いころ、この近くに住んでいた事。その時よく遊んでいた女の子の事、櫛の下で一緒に交わした、幾つかの約束

お兄さんは何も言わずに聞いてくれる。そのせいか僕も随分といろんな事を話してしまった。

「ううん、ちょっと心当たりはないかなあ。ここにきてまだ一年と経ってないし…」

僕の話聞き終えた後、その青年は申し訳なさそうな表情で答えた。

「いえ、いいんです。久しぶりに来た公園は楽しかったし、縁がなかったと諦めます。」

2、3言お礼を言い、その場を離れようとしたら、青年に引きとめられた。

「折角だから、占い、していかない？最近ハマってるんだ。」

ここまで来たら、付き合わないのも無粋な気がして、夕暮れで赤く染まった椅子に腰かける。

「このヘキサグラムっていうのはね、今直面してる問題にヒントを与えてくれるものなんだ。何か君にいい答えが見つかるかなと思っ
てね。」

そう言っつて青年はテーブルの上に手際よくカードを並べる。

六芒星の形に並べられた7枚のカードは現在過去未来や願望、そして最終的な結果が示されるのだという。

「まずは過去。太陽の正位置だね。無垢な幸せの中にいたと。現在は隠者の逆位置、ちょっと現状にマンネリを感じているのかもね。それでこの公園に来た、とかかな？」

なるほど、まあ見当違いな答えは出てこない。現状周りの友達もいい人ばかりだから、友達は大切にされた方がいい、そう伝えられて、残すは中心に置かれた最終結果のカードだ。

「これはマジシャンのカード。このカードの意味は…」

青年は悪戯をしている少年のような笑顔を浮かべ、答えを焦らす。

「今、君が振り向くと愛しの姫君が君を待っている、かな！」

随分と詩的な言葉を言う人だ。そう思いながら振り向くと、そこには学生服に身を包んだ可憐な少女が佇んでいた。

「え…もしかして…」
僕は反射的に席を立つ。

彼女は何も言わずに静かに頷いた。

「俺って詐欺師の方が向いてるかもね。その子、よくこの公園に来るんだ。昔の約束、大事にしたいからってさ。」

それから僕たちはいろんな話を話した。櫛の木は何年か前に倒木してしまつて、今はないということ。部活のない日はこの公園を通つて帰っていたこと。幼いころの思い出も、あの頃と同じ夕焼けの中で、淀みなく思い出される。

「約束の事はいいのかい？」
店じまいをしながら青年が話に入ってくる。

「えっ！？あ、っと…その…」
流石にお互いその事に触れるのは恥ずかしい。言葉に詰まってしまう。

そんな中、青年は続けた。

「何も心配することはないさ。だってさっきの魔術師のカード、本当の意味は希望に満ちた、無限の可能性なんだから、さ。」

青年の言葉に背中を押され、僕たちは向き合う。

真っ赤に染まつた空の下で、止まっていた時計が動き出した気がした。

(後書き)

私の駄文に最後までお付き合いいただきありがとうございました。
初投稿で今一勝手がわからない部分もあり、アドバイス、感想等頂
けましたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6478/>

公園

2011年1月26日23時36分発行